

取引先の資金繰り状況を しっかり把握しよう

試算表の確認とキャッシュフロー改善のポイント



細矢 進 (株)リフレ代表

試算表（貸借対照表）の見方を中心に、取引先の資金繰り実態のつかみ方を解説する。

企業と融資取引を行うにあたっては、「なぜ、いくらお金が必要なのか」「貸したお金がどこに行ったのか」「本当に返せるのか」という3点を把握できることが絶対条件である。これらを把握するためには、取引先企業の「商流とお金の関係」をつかむことが欠かせない。つまり金融機関としては、取引先について以下の具体的な内容を把握している必要がある。

⑦商品の仕入れ・製品の製造から販売に至るまでのモノとカネの動き・流れ

⑧仕入れ・販売（売上）や設備投資・プロジェクトの現状と、今後の見込みや計画

⑨現在の資金調達状況や償還方法

当然のことだが、十分な保全があるからといってこれらを確認せず、安易に融資に応じることは絶対にあってはならない。取引先の仕事と「資金繰り」をしっかり把握することから、付合の基盤ができていくのである。

試算表（貸借対照表）のチェックポイント

必要運転資金額を算出し

何で賄われているのか確認

企業の資金繰りを把握するためには、決算書（試算表）から見えてくる定量的な情報や、業種・業態的な特徴（商流）、そして今後の予定も含めた事業計画などの定性的な情報をベースに、想定されるお金の動きを考える必要がある。

企業活動において必要となる資金は、次の三つに集約される。

①機械や建物・システム等に使用する「投資資金」

②商売の「売り買い」の関係で発生する立替金やつなぎ資金である

「運転資金」

③赤字を補填するための「赤字資金」

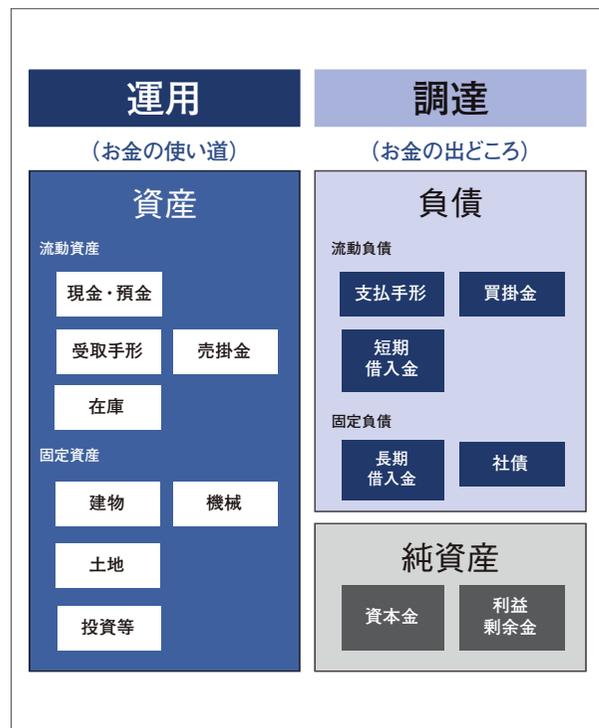
④の運転資金は、①の設備資金に比べて使途が明確でないため、注意が必要である。運転資金について「商売で足りなくなった分を埋めるお金」と捉え、赤字資金も運転資金と考えると、経営者は少なくないからだ。

正常な運転資金とは、商品・製品の売上代金回収される前に、「先行して発生する商品・製品の仕入れ・製造に係る仕入代金や外注費・諸経費」などのつなぎ資金である。この運転資金を借入金で調達する場合には、返済原資（売上代金として現金化される受取手形・売掛金や在庫）が明確に存在することが前提となる。

一方、⑤の赤字資金には明確な返済原資が存在せず、利益を上げて新たな資金を生み出さなければ返済できない。この「運転資金と赤字資金の違い」は、しっかりと認識しておこう。

これら①～⑤の資金は、決算書や試算表の貸借対照表を確認すれば

図表1 貸借対照表の構成



ば、決算日や試算表作成時点での状態が自ずと見えてくる。それを起点として経営者にヒアリングを行えば、現状や今後の資金繰りも見えてくるはずだ。

調達された資金は必ず資産に流れよう

では、貸借対照表の具体的な確認ポイントについて見ていく(図表1)。まずは、基本的な構造である「調達」と「運用」の関係を

「運用」の左側(運用)「資産の部」では、運転資金に關係する流動資産に注目したい。ご存知のとおり、運転資金は「売上債権+棚卸資産+買入債務」で計算される。流動資産には、この運転資金に大きく影響する売掛金・受取手形等の「売上債権」、商品・製品・原材料・仕掛品等の「棚卸資産」がある。簡単に言うと、売上債権は「貸している金」、棚卸資産は「寝ている金」である。

固定資産には、建物・機械・土地・ソフトウェア等の「有形固定資産」「無形固定資産」、そして投資有価証券・関係会社株式等の「投資その他資産」がある。つまりここには、「投資に關係するお金」が示されている。

「調達」負債・純資産の部

貸借対照表の右側(調達)「負債・純資産」には、前述の資産をどのような資金で賄っているかが明記されている。

こちらでも注目したいのは、運転資金に關係する流動負債だ。流動負債には、運転資金に影響を与える支払手形・買掛金等の「買入債務」、いわば「借りている金」が示されている。

その他には、短期の借入金や固定負債の社債・長期借入金等の金融機関から調達された有利子負債等がある。さらには、出資者の金である資本金や、事業の利益による蓄積である利益剰余金で構成されている。

調達された資金は必ず資産に流